鷗外に学ぶ―「役割」を生きた人―

九州女子大学教授
国文研常務理事　山田輝彦

一、木下杢太郎「森鷗外」（昭七・一一）

森鷗外は謂はばテェベス百門の大都である。東門を入っても西門を窮め難く、百家おのおの一両門を視て他の九十八九門を遺し去るのである。

二、留学出発時の漢詩（明一七・八・二四）

水柵天明るうして警析鳴る渭城の歌罷みて又觥を傾く
烟波浩蕩として心胸豁し　好し扁舟を放たむ万里の行

三、「独逸日記」（明一八・八・一三）

架上の洋書は已に百七十余巻の多きに至る。／ダンテ Dante の神曲 Comedia は幽昧にして恍惚、ギョオテ Goethe の全集は宏壮にして偉大なり。誰か来りて余が楽を分つ者ぞ。

四、「小倉日記」（明三二・六・一六―三五・三・二八）

○私に謂ふ師団軍医部長たるは終に舞子駅長たることの優れたるに若かずと。（三二・六・一八）

○井上中将以下の将校予をしてクラウゼヰッツ Clausewitz の戦論を偕行社に講ぜしむ。是日始て講筵を開く。（三二・一二・一二）

○賀古鶴所書を寄す。中に新聞紙の断簡を挿めり。これを見れば一の告喪文なり。左の如し。（略）嗚呼是れ我が旧妻なり。於菟の母なり……。（三三・二・四）

○母親の書「旧婢碩子の木内氏に嫁するを報ず。（三四・一二・一六）

○茂子を娶る。（明三五・一・四）

○電報あり。曰く。第一師団に転ずること発表せらるると。（三五・三・一五）

五、乃木将軍（『うた日記』明四〇・九）

(一)
つはものの　武勇なきには　あらねども
真鉄なす　べとんに投ぐる　人の肉
往くものは　生きて還らぬ　強襲の
鉾を　しばし転じて　右手のかた
図上なる　標のたかさ　二零三
嶺の　ふたつ聳ゆる　石やまに
たえだえの　望のいとを　掛けてこそ
きのふけふ　軍の主力を　向けてしか

(二)
霜月の　三十日の　夕まぐれ
将軍は　高崎山の　師団より
ただ一騎　柳樹房なる　本営に
帰らんと　曲家屯をぞ　過ぎたまふ
ほの暗き　道のほとりを　見たまへば
身うち皆　血に塗れたる　卒ありて
そびらには　はやこときれし　将校の
亡骸を　かきのせてこそ　立てりけれ

(三)
汝は誰ぞ　聞召せ　主と頼む
年老いし　そのひとり　南山に
おとうとの　背負へるは　そを何処にか
背負ひまつるは　乃木将軍の
将軍の家の　勝典ぬしは　討たれ給ひて
保典のぬし　その一人子の　負ひてゆく
奴わが　愛児なり　二人子
いちはやく　残れるは　ひとりのみ
亡骸ぞ

(四)
父君は　心ををしく　我主をも
隊附の　ままにあらせて　討死の
身の果は　おのれと三人　葬をば
ひと時に　営めと宣り　給ひしを
人人の　強ひて料らひ　つるにより
さいつ頃　友安旅団の　副官に
職かはり　まだ程経ぬに　この朝開
あへなくも　空しき骸と　なりましぬ

(五)
果てましし　処は高地　二零三
目鏡もて　敵の備を　望みます
うら若き　額のただ中　打ち貫かれ
ひと言を　宣給はん　ひまもなく
持口の　南の峯に　うせ給ふ
その骸を　奴背負ひて　北村に
ありと聞く　野戦病院　たづぬれど
くるほしき　心からにや　たづねえず

(六)
かくいふを　駒をとどめて　聞きましし
将軍は　病院の旗　あるかたを
鞭あげて　彼方にこそと　さし給ふ
面ざしは　かはたれ時に　見えねども
目ざとくも　雲の絶間ゆ　覗ひし
さむ空に　まだ輝かぬ　冬の星
更闌けて　友なる星に　将軍の
睫毛だに　動かざりきと　語りけり

六、「妄想」（明四四・四）

ショオペンハウエルを読んで見れば、ハルトマン・ミヌス・進化論であった。世界は有るよりは無い方が好いばかりではない。出来るだけ悪く造られてゐる。世界の出来たのは失錯である。

無の安さが誤つて攪乱せられたに過ぎない。世界は認識によつて無の安さに帰るより外はない。一人一人の人は一箇一箇の失錯で、有るよりは無いが好いのである。

七、鷗外日記（明四五・四・二四）

上原大臣官邸の晩餐会にゆく。乃木大将希典来て赤十字に関する意見を呈せしを謝し、Carmen Sylva 妃に逢ひしことを語り、白樺諸家の言論は注意すべきことを托す。

八、鷗外日記（大元・九・一八）

（前略）午後乃木大将希典の葬を送りて青山斎場に至る。興津弥五右衛門を呈して中央公論に寄す。

九、「安井夫人」（大三・四）

お佐代さんは夫に仕へて労苦を辞せなかつた。そして其報酬には何物も要求しなかつた。

啻に服飾の粗に甘んじたばかりではない。立派な第宅に居りたいとも云はず、結構な調度を使ひたいとも云はず、旨い物を食べたがりも、面白い物を見たがりもしなかつた。お佐代さんが奢侈を解せぬ程おろかであつたとは、誰も信ずることが出来ない。

又物質的にも精神的にも、何物も希求せぬ程恬澹であつたとは、誰も信ずることが出来ない。お佐代さんには慥かに尋常でない望があつて、其前には一切の物が塵芥の如く卑しくなつてゐたのであらう。／お佐代さんは必ずや未来に何物かを望んでゐたゞらう。そして瞑目するまで、美しい目の視線は、遠い、遠い所に注がれてゐて、或は自分の死を不幸だと感ずる余裕をも有せなかつたのではあるまいか。

一〇、遺　書（大一一・七・六、賀古鶴所に口述）

余ハ少年ノ時ヨリ老死ニ至ルマデ一切秘密無ク交際シタル友ハ賀古鶴所君ナリコ、ニ死ニ臨ンテ賀古君ノ一筆ヲ煩ハス死ハ一切ヲ打チ切ル重大事件ナリ奈何ナル官権威力ト雖此ニ反抗スル事ヲ得スト信ス余ハ石見人森林太郎トシテ死セント欲ス宮内省陸軍省皆縁故アレドモ生死相別ル、瞬間アラユル外形的取扱ヒヲ辞ス森林太郎トシテ死セントス墓ハ森林太郎墓ノ外一字モホル可ラス書ハ中村不折ニ依託シ宮内省陸軍ノ栄典ハ絶対ニ取リヤメヲ請フ手続ハソレゾレアルベシコレ唯一ノ友人ニ云ヒ残スモノニシテ何人ノ容喙ヲモ許サス

一一、螢の光（『小学唱歌集』明一四・一一）

つくしのきはみ、みちのおく、　　千島のおくも、おきなはも、
うみやまとほく、へだつとも　　やしまのうちの、まもりなり
そのまごころは、へだてなく　　いたらんくまなく、いさをしく
ひとつにつくせ、くにのため。　　つとめよわがせ、つつがなく。